

(映画『大好き』のワンシーン)

●近所の公園

満開の桜の木の下で語るお母さん。

お母さん「今は羊水検査で障がいがあると分かった子は産まない人もたくさんいるらしくて、そういうことがわからない時に、奈緒さん、生まれてきてよかったなってね…。奈緒さんが『あたしはちょっと生まれ出なきゃダメなのよ』って言わんばかりに(笑)」

●写真：泣き叫んでいる赤ちゃんの奈緒ちゃん

お母さん「教わることが多いの」

かんとく「教わることはっかり？」

〈水の滴る音・鳥の囀り・波の音〉

〈♪ピアノのメロディー「326」〉

映画『大好き』は、「育み、育まれる家族のしあわせ」という映画『奈緒ちゃん』（1995年）完成時に思い描いた、こうなってほしい…という私たちスタッフの願望のようなメッセージが、50年の歳月の中で実現して行く物語、と言ってもいいかも知れない。

障がいのある「奈緒ちゃん」を育てることで「奈緒ちゃん」に逆に育てられていく、という家族の物語…。もう少しいえば「家族」を「地域」とか「社会」と言い換えられたらいいのに、という願望だ。

映画の中で「奈緒ちゃん」のお母さんは、何度も「教わることが多い」「奈緒に育てられた」と語っている。言い換えれば、「奈緒ちゃん」からのメッセージをお母さんが代弁している映画とも言えるかも知れない。

「私は生まれ出なきゃダメなのよ…」という強い思いを持って生まれ、生きた奈緒ちゃんの50年が私たちに語りかけるメッセージは、とても大切なことを伝えようとしているように思う。「いのち」は生きる方に向かうのだから…という“本当のこと”を。

つい最近のニュースで、1948年に制定され1996年まで存在していた「旧優生保護法」の手術規定は憲法違反であるという最高裁の判決が出たことを知った。

「不良な子孫の出生を防止する」との目的で理不尽な不妊手術を強いられた障がい者等の被害者の数は分かっているだけで25,000人に及ぶと言われている…。

奈緒ちゃんの障がい「てんかん」も、その手術規定の対象であったという。

所謂「優生思想」は第二次世界大戦下のナチズムの思想で、現代の私たちの社会には関係ないと思っている人も多いかもしれないが、つい最近まで、まさしく「優生思想」そのものの法律が「民主国家」日本にあり、2018年に被害者たちが声を上げるまで、国はこの基本的な人権を侵す憲法違反の法律を放置していたのだ。

相模原での障がい者大量殺傷事件を一人の極悪非道の犯罪者が犯した事件と言うよりも、社会の責任だ…と、映画『大好き』の中で、奈緒ちゃんのお母さんはキッパリと言う。

「優生思想」がまかり通っている日本の社会そのものが問われなければならないと。

奈緒ちゃんは
「旧優生保護法」が言うように
「不良な子孫」だろうか…
「相模原事件の犯人」が言うように
「役に立たない人間」だろうか…

映画『大好き』に目を凝らし、
耳を澄ませ「本当のこと」を受け止めてほしい。

伊勢真一のヒューマンドキュメンタリーは、
現実から目を逸らしている…甘い、と
時々、言われてきたけれど、
「本当のこと」が写っている筈なんだ。